1999年度鹿児島大学日本語プログラムの実施報告

医学部　大嶋眞紀
教育学部　中島祥子
鹿児島純心女子短期大学　小田智代

Ⅰ　日本語プログラム全体について

鹿児島大学日本語プログラムは春期と秋期の2期に分け、それぞれ15週間実施した。春期は４月15日にプレースメントテストとオリエンテーションを行い、４月19日から授業を開始した。初級会話は３レベル（３科目）、初級基礎漢字（１科目）、中級会話（１科目）、中級基礎作文Ⅰ（１科目）、上級専門読解（１科目）、上級日本文化論（１科目）、上級会話Ⅱ（１科目）に分け、合計９科目（16コマ）を開講した。また、桜ヶ丘クラスでは、初級会話（１科目）と中級会話（１科目）の２科目（２コマ）を開講した。

秋期は10月21日にプレースメントテストとオリエンテーションを行い、10月25日から授業を開始した。新しい科目を加え、科目を再編成し、プログラムの充実に努めた。その結果、初級会話は３レベル（３科目）、初級基礎漢字（１科目）、中級会話Ⅰ（１科目）、中級会話Ⅱ（１科目）、中級基礎作文（１科目）、中上級総合（１科目）、上級日本文化論（１科目）、上級Ⅲ（読解）（１科目）、上級Ⅳ（作文）（１科目）の計11科目（19コマ）を開講した。また、春期と同じく、桜ヶ丘クラスでは初級会話（１科目）と中級会話（１科目）の２科目（２コマ）を開講した。各々の科目の担当講師、使用テキスト、国籍別学習者数、授業状況などの詳細に関しては「Ⅱ．日本語プログラム活動報告」で報告を行い、以下では1999年度日本語プログラムの全体的な実施報告を行う。なお、本プログラムは本来留学生を対象としているが、留学生の家族に関しても受講を認めている。

A　プレースメントテストについて

本プログラムは日本語学習者の能力に応じてクラスを編成している。クラス分けのためのプレースメントテストは、春期・秋期ともに、筑波大学留学生センター開発のSPOT（Simple Performance-Oriented Test）と文法問題などの結果を総合してクラス分けを行った。

プレースメントテストに関しては主に二つの問題点があった。一つはプログラム開始前にプレースメントテストを行うわけだが、本部留学生係が事前に掲示し、プレースメントテストの日程を学生に知らせていても、当日、現れず、プログラムが始まってから、授業に直接出席する学生がいた。そのような学生には授業中に文法のテストだけを受けさせ、その結果だけでクラスを決定しなければならない。もう一つはプレースメントテストの結果を守らずに、自分の能力を過大評価し、実力以上のクラスに行きたがり、担当講師や他の学生に迷惑をかけるケースがあったことである。今後は、スケジュールの連絡を徹底するとともに、プレースメントテストの方法についても検討していくことが必要だろう。

B　開講クラスについて

春期・秋期の開講クラスは次頁の表の通りである。開講場所については、国際交流会館１号館ホール（表の中で「会」と表示）や共通教育棟１号館講義室（表の中で「共」と表示）、さらに、桜ヶ丘のクラスは医学部国際交流室（表の中で「医」と表示）などで開講した。

春期は、初級会話３クラスとも週に３回、中級会話は週に２回、他の科目は週に１回開講した。中級会話は担当講師の都合により、18:30～20:00 に行った。

秋期は春期と同様に初級会話３クラスとも週に３回、中級会話I と中上級総合は週に２回、他の科目は週に１回開講し、初級会話Ⅱと中級会話Ⅰは担当講師の都合により、18:30～20:00 に行った。

C　授業方法について

初級会話Ⅰでは、学習者にひらがなやカタカナが定着するまでは教科書であるSFJ Vol.1をそのまま使用することが難しいため、担当者が工夫し、自主作成した教材を多く使った。その他のクラスでも特に初級・中級レベルでは教科書が中心ではあったが、教師が自分で作成した教材を使用したり、OHP などの視覚機器やテープレコーダー、ビデオなどのオーディオ機器を用い、学習者の理解を深めるように工夫を行った。

D　学習者の出席状況について

本プログラムでは全授業に85％出席し、修了テストで60％以上の点数を取った者に修了証を発行している。全体的にこの85％の出席というのはやや厳しいようである。日本語プログラムは単位が出ないため、授業開始時に登録をしていても、途中で出てこなくなるケースが多い。特に春期の初級会話Ⅲや秋期の初級会話Ⅱ、中級会話Ⅰでは最初に登録した学習者数と修了証を獲得した学習者の数に差が出た。初級のクラスは週に３回あるため、85％の出席を満たすことが難しくなっていると思われる。また、実験・研究などで忙しく、授業に出てぐる余裕がない学生が多いようである。しかし、本プログラムでは語学の教育効果を考え、85％という基準を設けているので、今後もプログラム開始直後、登録した学生にはできるだけ出席を促すよう指導したい。

E　学習者の学習意欲について

全体的に、初級のうちは非常に積極的にクラスに参加する学習者が、初級の最後のレベル、初級会話Ⅲが修了すると、日本語の学習をやめていく傾向がある。日本での留学生生活を効果的に全うするためには、初級で終わるのではなく、中級、上級でさらなる学習を続けることが望ましい。今後もそのように指導していきたいが、学習者の意欲の減退だけではない問題も多い。

学習者の内訳については、春期は特に初級・中級レベルでは留学生の家族の人数が多いが、秋期には学生の人数の方が多い傾向にある。したがって、春期はややスローペースになりがちであるが、秋期になると学習者の積極的な取り組みが見られる。しかし、理工系の学生の中には実験と重なり、

85%の出席ができないと訴える学生もいた。また、学習者が大学院生である場合、研究室によっては日本語の必要性を感じない学生もおり、個々の動機付けにも差が見られた。

F　修了テストについて

春期・秋期ともに、最終週の15週目に修了テストを行った。その際、事前に各科目の担当者が集まり、お互いのテスト問題を検討し合った。ほとんどのクラスが筆記試験を課したが、中級会話Ⅰでは口頭試験も行った。修了証を取得するためには、修了テストで60%以上得点することが一つの条件であるが、出席を85%以上満たしている学生に関しては、ほとんど全員60%以上得点していた。

（鹿児島純心女子短期大学　小田智代）

開講期 クラス名	春期 曜日・時間（開講場所）	秋期 曜日・時間（開講場所）
初級会話Ⅰ	月・水・金 10:40～12:10(会)	月・水・木 9:00～10:30(会)
初級会話Ⅱ	月・木・金 9:00～10:30(会)	月・水・金 18:30～20:00(会)
初級会話Ⅲ	月・水・木 12:50～14:20(会)	月・水・木 12:50～14:20(会)
初級基礎漢字	木　14:30～16:00(共)	月　14:30～16:00(共)
中級会話	火・金　18:30～20:00(会)	
中級会話Ⅰ		火・木　18:30～20:00(会)
中級会話Ⅱ		金　10:30～12:00(共)
中級基礎作文Ⅰ	木　16:10～17:40(共)	木　12:50～14:20(共)
中上級総合		水・木　10:30～12:00(共)
上級専門読解	金　14:30～16:00(共)	
上級日本文化論A	金　8:50～10:20(共)	
上級日本文化論B		木　8:50～10:20(共)
上級会話	木　10:30～12:00(共)	
上級Ⅲ（読解）		金　10:30～12:00(共)
上級Ⅳ（作文）		木　10:30～12:00(共)
桜ヶ丘初級会話	火　13:30～15:00(医)	火　13:30～15:00(医)
桜ヶ丘中級会話	木　15:30～17:00(医)	木　13:30～15:00(医)

Ⅱ 日本語プログラム活動報告

＜春期＞1999年４月～1999年９月

１．初級　会話Ⅰ　Elementary Speaking Class Ⅰ

担当講師　本田 明子

使用テキスト　Situational Functional Japanese Vol.1 Drills（凡人社）

国籍別学習者数　インドネシア４名、中国３名、エジプト２名、韓国１名、アルゼンチン１名、バングラデシュ１名、インド１名、セネガル１名、バルバドス１名

授業状況　日本語に慣れ、日常的な簡単な会話が日本語でできるようになることが目標。留学生の家族が中心で、学習意欲は高く、質問やフリートークが活発に行われた。出席率85%以上は6名。学生4名のうち、3名は途中から来なくなった。

２．初級　会話Ⅱ　Elementary Speaking Class Ⅱ

担当講師　上野美代子

使用テキスト　Situational Functional Japanese Vol.2 Drills（凡人社）

国籍別学習者数　インドネシア5名、中国1名、バングラデシュ1名、フランス1名、ルーマニア1名、パプアニューギニア1名

授業状況　スタート時、登録者は16名だったが、専門の授業の都合などで殆ど出席できない者が数名いた。しかし、10名は出席率が85%以上であった。SFJ Vol.1からの会話力を発展させることが目標であったが、できる人とできない人の差がついた。教科書以外にも、日常使われる会話の練習を行ったり、文法や問題のプリントを適宜配り、予習・復習をうながした。学生は全体的に授業に積極的で、文法に関する質問も多かった。よくまとまった雰囲気のよいクラスだった。

３．初級　会話Ⅲ　Elementary Speaking Class Ⅲ

担当講師　マルヴィー菜穂子

使用テキスト　Situational Functional Japanese Vol.3 Drills（凡人社）

国籍別学習者数　中国４名、バングラデシュ２名、韓国１名、コロンビア１名、セネガル１名、インドネシア１名、ギニア１名

授業状況　11名で始めたが、最後まで続いたのは3,4名である。初級会話の完成を目標とし、そのために必要な文法事項の導入、練習、応用を中心に授業を進めた。小人数ではあったが、ロールプレイ、ディスカッション、ゲームなどでクラスがより活発になり、楽しく進めることができた。

4．初級　基礎漢字　Basic Kanji Class

担　当　講　師　　廣瀬 勢

使用テキスト　　「Basic Kanji Book 基本漢字500 Vol.1」（凡人社）

国籍別学習者数　　インドネシア２名、ブラジル１名、ミャンマー１名

授　業　状　況　　初級前半から上級レベルの学生が４名受講した。期間前半はテキストにそって漢字の書き方を指導したが、後半は各自の要望に応じて個別指導をした。実力をつけるためには、毎日の練習が不可欠だが、時間的な余裕のない学生が多いようで残念に思った。

5．中級　会話Ⅰ　Intermediate Speaking Class Ⅰ

担　当　講　師　　小田 智代

使用テキスト　　Japanese for you（大修館書店）

国籍別学習者数　　中国５名、アメリカ１名、バングラデシュ１名、ミャンマー１名

授　業　状　況　　授業が18時30分に始まるため、登録者以外に聴講する学生も６名いた。出席率は80～85％であった。初級で既習の文法事項をいかに自然な発話として使うかということを目標とし、教科書に従い、語彙を増やすように努めた。

6．中級　基礎作文Ⅰ　Intermediate Basic Writing Class Ⅰ

担　当　講　師　　廣瀬 勢

使用テキスト　　「絵入り日本語作文入門」（専門教育出版）

国籍別学習者数　　中国３名、ブラジル２名、韓国１名、パナマ１名、ミャンマー１名、ネパール１名

授　業　状　況　　初級後半から上級レベルの学生が７名前後受講した。テキストにそって文法の説明、トピックでの話し合いの後、作文を課した。かなり読解力や会話力があっても、漢字かな混じりで書くのは難しいようだ。作文の練習によって、正確な日本語の習得を目指して欲しいと思う。

7．上級　専門読解　Advanced Reading Class

担　当　講　師　　本田 明子

使用テキスト　　『日本語練習帳』（岩波新書）、新聞記事など

国籍別学習者数　　中国２名、韓国２名、ネパール１名

授　業　状　況　　目標は、実際に読まれている専門的な文章を、辞書を用いながら正確に読むこと。３名が常に出席、２名が時々参加した。日常語に関する疑問点から専門用語まで、多様な質問があり、日本語に対する意欲の高さが感

じられた。

8．上級　日本文化論 A　Japanese Culture A

担　当　講　師　　大嶋 眞紀

使用テキスト　　ハンドアウト

国籍別学習者数　　中国６名、マレーシア３名、ブラジル１名、マカオ１名、アメリカ１名

授　業　状　況　　トピックを設定して、読む、話す、聞くの訓練を中心に行った。取り上げたトピックは、住宅事情、日本の家族、差別、明治時代の異文化摩擦などである。来日して日の浅い留学生自身の違和感、発想の転換、問題解決の方法などを考えさせることに力点を置いた。トピックに応じた視聴覚教材も用いた。出席率は良好。

9．上級　会話Ⅱ　Advanced Speaking ClassⅡ

担　当　講　師　　中島 祥子

使用テキスト　　自主作成教材、「日本語教育映像教材 中級編」（国立国語研究所）、「実戦力のつく日本語学習 アンケート編」（アルク）など

国籍別学習者数　　中国７名、マレーシア３名、韓国１名、マカオ１名

授　業　状　況　　この授業では、コミュニケーションを円滑にするための様々な表現やストラテジーを学ぶことに目標を置いた。また、インタビューを行うことにより、これらの表現を実際に使用し、最後的に結果をまとめて発表を行う練習をした。

10．桜ヶ丘クラス　初級会話　Sakuragaoka Elementary Speaking Class

担　当　講　師　　中原 真澄

使用テキスト　　Situational Functional Japanese Vol.2 Drills（凡人社）など

国籍別学習者数　　中国10名、イラン１名、インド１名、ギニア１名、タイ１名、フィリピン１名、ブラジル１名、ボリビア１名、モンゴル１名、ヨルダン１名

授　業　状　況　　常時８～６名の出席者で、一応初級の基礎が終わった段階であった。復習と会話の練習、文法練習などを中心に行うことにし、SFJを使用した。

11．桜ヶ丘クラス　中級会話　Sakuragaoka Intermediate Speaking Class

担　当　講　師　　中原 真澄

使用テキスト　　「日本語作文Ⅱ」（専門教育出版）など

国籍別学習者数　　中国10名、イラン１名、インド１名、ギニア１名、タイ１名、フィリピ

ン１名、ブラジル１名、ボリビア１名、モンゴル１名、ヨルダン１名

授　業　状　況　　常時８～12名の出席者で、一応初級レベルの会話ができる学習者であったので、トピックを与えて会話の練習を行った。中には、自ら作文を書いてきたり、漢字の勉強を始めたり、日本語能力検定試験を目指す学生も出てきた。

＜秋期＞1999年10月～2000年２月

1．初級　会話Ⅰ　Elementary Speaking Class Ⅰ

担　当　講　師　　上野美代子

使用テキスト　　Situational Functional Japanese Vol.1 Drills（凡人社）
「わくわく文法リスニング」（凡人社）

国籍別学習者数　　中国６名、インドネシア５名、バングラデッシュ１名、フィリピン１名、ソロモン１名、カンボジア１名、タイ１名

授　業　状　況　　中国人学習者以外は、日本語を初めて学習する者ばかりであった。発話の機会を多くするために、テキストの練習問題のほかにペアワークの作業を多くしたり、文法事項をまとめたプリントを用意し予習・復習に当てるなどの工夫を行った。

2．初級　会話Ⅱ　Elementary Speaking Class Ⅱ

担　当　講　師　　田原 良子、永正理恵子

使用テキスト　　Situational Functional Japanese Vol.2 Drills（凡人社）

国籍別学習者数　　中国４名、アルゼンチン３名、バングラデッシュ２名、セネガル１名、モーリタニア１名、インドネシア１名、ミャンマー１名、カンボジア１名、ルーマニア１名、ブラジル１名

授　業　状　況　　正式に登録した学生は16名であったが、継続的に出席する学生は8名程度であった。それらの学生も実験や研究のために休まざるをえないことが時としてあり、85％以上の出席率を保つのは容易なことではなかった。学生は、動詞や文の複合形を中心とした表現の意味と用法をmodel dialogueやsubstitution drillから理解し、日常的な場面の中で発話する練習を重ねた。

3．初級　会話Ⅲ　Elementary Speaking Class Ⅲ

担　当　講　師　　マルヴィー菜穂子

使用テキスト　　Situational Functional Japanese Vol.3 Drills（凡人社）

国籍別学習者数　　インドネシア６名、コロンビア１名、バングラデシュ１名、マレーシア１名、ミャンマー１名、メキシコ１名

授　業　状　況　　11名の登録者のうち、3名は始めから2名は途中から、学習意欲があるにもかかわらず、専門科目の授業や実験と重なり出席できなかった。とても残念であったが、どのようにそれを解決していくかは今後の課題である。インドネシアの学習者が多く、活発な授業参加が見られた。初級会話の完成を目標に授業を進めた。

4．初級　基礎漢字　Basic Kanji Class

担　当　講　師　　山下 敬子

使用テキスト　　「Basic Kanji Book 基本漢字500 Vol.1」（凡人社）

国籍別学習者数　　インドネシア３名、中国２名、カンボジア１名、タイ１名、ソロモンアイランド１名、ブラジル１名

授　業　状　況　　出席者は７～８名平均。年が明けて、やや出席が多くなった。漢字の意味、音読み・訓読み、書き方、簡単な熟語習得を主な目標とした。授業の前半は、先週の復習、テストと宿題チェック、後半は、新出漢字の練習を行った。受講者は意欲的で、特に留学生の家族を含む６名は、熱心に受講していた。

5．中級　会話Ⅰ　Intermediate Speaking Class Ⅰ

担　当　講　師　　小田 智代

使用テキスト　　Japanese for you（大修館書店）第１課～第８課

国籍別学習者数　　インドネシア２名、マレーシア１名、ミャンマー１名、中国１名、タイ１名、韓国１名

授　業　状　況　　最終的に修了証を取得できたのは4人となった。４人に関しては、80～100%の出席率であり、従来の中級学習者より、コミュニケーション能力もあったが、中には漢字を含めた文字の定着の悪い学習者もいた。

6．中級　会話Ⅱ　Intermediate Speaking Class Ⅱ

担　当　講　師　　中原 真澄

使用テキスト　　Japanese for you（大修館書店）第９課～第12課

国籍別学習者数　　中国１名、韓国１名、ギリシャ１名、タイ１名、バングラデッシュ１名、ミャンマー１名

授　業　状　況　　６名の学習者のうち４名が85%以上出席し、出席日数が足りている。授業態度は大変まじめで、かつ積極的で質問も多く、意欲的な学習態度だっ

た。時間数が少なく会話の流暢さはまだまだだが、内容の理解はかなりできる。

7. 中級　基礎作文　Intermediate Basic Writing Class

担当講師　廣瀬 勢

使用テキスト　「絵入り日本語作文入門」（専門教育出版）

国籍別学習者数　中国１名、インドネシア１名、タイ１名

授業状況　初級後半から中級レベルの学生が3名前後受講した。テキストにそって文法の復習、トピックでの話し合いの後、作文を課した。練習問題はかなりスムーズにできるが、会話や作文で不自然な表現が見られた。特に、非漢字圏の学生には、やはり漢字の使用が難しいようだ。

8. 中上級　総合　Intermediate-Advanced Class

担当講師　廣瀬 勢

使用テキスト　「生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語」（The JapanTimes）

国籍別学習者数　マレーシア３名、中国２名、ネパール１名、ポーランド１名、モンゴル１名、オーストラリア１名

授業状況　中級前半から上級前半レベルの学生が９名受講した。テキストの重要表現を中心に説明の後、短文を作らせたり、本文やコラムを読んで話し合ったりした。学習内容の確認のため毎週宿題を課し、また毎回漢字のテストを実施した。一部の学習者を除き、多くの者が積極的に取り組んでいた。

9. 上級　日本文化論 B　Japanese Culture B

担当講師　大嶋 眞紀

使用テキスト　ハンドアウト

国籍別学習者数　中国７名、マレーシア３名、ブラジル１名、アメリカ１名、ポーランド１名、オーストラリア１名、韓国１名、モンゴル１名、（日本１名）

授業状況　講義を行い、毎回聴解力を確かめるため、ノートを提出させた。扱ったトピックは、イエ社会の理論、都市化、タテ社会、日本人の美学、ウチとソト、親子関係などである。また講義に即した速読の訓練、精読課題なども与えた。日本人学生が1名常時出席し、インフォーマントの役割を果たした。出席率は良好。

10. 上級　Ⅲ（読解）　Advanced Class Ⅲ（Reading）

担　当　講　師　　中島 祥子

使用テキスト　　「上級日本語」（凡人社）、「日本語の表現技術 読解と作文」（今古書院）、新聞記事など

国籍別学習者数　　中国６名、韓国２名、マカオ１名、ブラジル１名

授　業　状　況　　学習者の専門がまちまちであるので、一つの分野にこだわらずできるだけ多くの文章を読み、語彙や表現を増やすことを目標とした。授業中にはテキストをじっくり読み、それとは別に宿題の読み物も課し、毎回漢字のテストを実施した。受講者の出席率もよく、熱心に受講していた。

11. 上級　Ⅳ（作文）　Advanced Class Ⅳ（Writing）

担　当　講　師　　中島 祥子

使用テキスト　　「実践にほんごの作文」（凡人社）、「大学生と留学生のための論文ワークブック」（くろしお出版）など。

国籍別学習者数　　中国６名、韓国１名、マカオ１名、ブラジル１名

授　業　状　況　　論文作成に必要な表現の習得と、ある程度まとまった文章を作成することを目標に授業を行った。授業では表現の解説と簡単な練習を行い、宿題で作文を課した。最後に課題を与え、レポートを作成させた。出席は良好。

12. 桜ヶ丘クラス　初級会話　Sakuragaoka Elementary Speaking Class

担　当　講　師　　中原 真澄

使用テキスト　　Situational Functional Japanese Vol.2 ,Vol.3 （凡人社）
「入門日本語発展編」（アルク）

国籍別学習者数　　中国５名、韓国２名、インドネシア１名、タイ１名、ブラジル１名、ヨルダン１名

授　業　状　況　　研究などが忙しく、続けて出席できた学習者は少なかったが、4～8名が交替で出席した。授業態度はまじめて意欲的であり、会話も上達している。日本語能力検定試験の3級を受験した学習者もいた。

13. 桜ヶ丘クラス　中級会話　Sakuragaoka Intermediate Speaking Class

担　当　講　師　　大嶋 眞紀

使用テキスト　　ハンドアウト

国籍別学習者数　　中国１１名、韓国２名、ブラジル１名、ボリビア１名、ヨルダン１名

授　業　状　況　　中級前半の教材を用いて、読解、会話の練習をしたが、学生の出席が不

ぞろいで、また漢字の識字能力にもばらつきがあるため、毎回教材の調整に苦心した。医学部の大学院レベルの留学生は、論文の執筆が英語であるため、英語能力は高いが、日本語については学習意欲にむらがある。

（教育学部　中島祥子）

Ⅲ．おわりに

鹿児島大学の日本語課外補講。課外とはどういうことか？補講というのは何かつまらない付け足しのように聞こえるかもしれない。実際，赴任した当初はこれ，なあにと思ったものだ。義務か，ボランティアか。結論はどこにもない。文部省にもない。何しろ，今だに単位の出ない，非正規科目，一種の幽霊科目だ。

けれども，留学生は実際，目の前にいる，幽霊であろうとなかろうと必要とする人がいる。日本語の不自由な人，もっと伸ばしたい人，本当に多種多様な留学生を対象に，いつ，どこで，誰が，何を，どうやって，なぜ教えるかを模索しながら，十年以上の月日が流れた。

この間の活動についてあまり知られていないことは知っている。何しろ日本語は日本では空気のようなものだ。話せて当たり前，教えるのも簡単，誰でも片手間でやれると考えるのも無理はないからだ。

しかし現場を見れば，そうはいかないことは自ずと知れる。ほんのちょっとした挨拶，日常会話，あいうえおを教えるだけでも何十時間の準備や，打ち合わせを重ねている。

そういったことがこの実施報告でも少しはうかがえたのではないかと期待している。しかし過去十数年の歩みについては，稿を改めてご報告したいと思っている。日本語教育の具体像を少しでも知っていただきたいと願う次第だ。

（医学部　大嶋真紀）